

明治四十五年四月印行

和亭集

大日本國華社

明治
45.4.8
丙寅

瀧 和 亭 翁 傳

和亭翁名は謙字は子直和亭は其號にして又別に蘭田とも號す幼名長吉後通稱を邦之助と改む本姓は田中氏後改めて瀧宮と云ふ瀧は翁の自ら稱ふる所なり天保元年正月三日を以て江戸千駄谷村に生まる父を平吉と云ひ素と藝藩の浪士にして移りて江戸に來り住せる者母はきの子上總國の人なり翁生れて七八歳にして既に丹青の技を嗜むこと深く偶々大岡雲峰の門人にて佐藤翠崖と云へる人の翁の家に近く住せるありしに因り之に就きて學ぶ所あり當時雅號を水山と云ひ幾ならずして翠山と改め後寛木木舜寛海と及び片桐桐陰に贊をとりしが其更に轉じて大岡雲峰の門に入りしは實に翁が十六歳の時なり今向島牛の御前の拜殿の天井に水山なる落款を留めたるは實に翁が此時代に揮洒せる所のものなり雲峰の門下に在りて翁は當時流行の北宗畫よりして始めて畫道に悟入することを得たりしが翁は斯道練磨の餘力を以て尙他に研鑽の功を積むことを怠らざりき佐久間某及び丹羽左京大夫の家臣越智次郎に就きて弓馬の術を學び植村榮次郎に就きて劍法を授かりし如き即是なり然れども翁の師として其將來に深大なる影響を與へしは實に坂本浩然及び田口霞村の兩氏なり浩然は別に香村と號し本草學に長じ且つ詩文を善くせり翁の此人に就きて詩文を學び且つ草木寫生の事を窮めしは今其年所を詳にするに由なしと雖田口霞村に就き書道を學びしは正に十九歳の時にして翁が遠く長崎に遊ばむとするの志を立てしは此兩氏の慈愷蓋し與りて大に力ありしと云ふ

嘉永三年三月翁遂に長崎に遊ぶ時に年二十歳なり其途次同じく雲峰の門人にして東海道吉原驛に住せる鈴木香峰の家を過ぎり淹留すること數日京師に入るに及びては翁の叔父にして久我家の有職たりし瀧宮藏人の許に寓すること日あり後宇治の黄蘗山萬福寺に移り良忠如隆禪師に就きて禪法の要義を問ふ禪師翁の人と爲り明敏萬異其舉止毅然として犯すべからざるを見て翁に勸めて出家せしめむとす翁固辭して去る

嘉永四年翁近畿を出で、四國に轉遊し讃岐和田濱の藤村氏に寓す藤村氏雅懷あり詩文を善くせるが故に翁以て與に語るべしとなし居ること二箇月去りて伊豫に入り松山に遊ぶ翁の此兩國に在るや古畫を模寫せるもの甚多し同年翁四國を去り下の關を経て小倉より陸路長崎に到り先づ興福寺に投ぜしが時に同寺の僧紀大に廢れたりしを以て翁此處に在るを快しとせず出で、唐通事遊龍彦十郎氏に依れり遊龍氏翁の人と爲りを高しとして厚遇頗る臻り其男をして翁に就きて畫を學ばしむ

而して翁も亦遊龍氏の紹介に依りて來船の清人に接するの便を得たりしが、當時其等の清人中には陳逸舟、華昆田、錢少虎、江元機等の在るありて、皆文事あり、書畫を善くせしを以て、翁は此輩と交はりて益せる所少からざりしと云ふ。長崎に在るの間、翁は多く支那人の畫を見、且模寫に勉め、殊に惲南田、周筮等の没骨法の大に取べき所あるを覺り、頗に其法格を學べり、而して翁が此際周筮に則りて畫ける花卉の圖一卷、現今中村清藏氏藏は、實に翁の才能が困りて以て認めらるゝに至りし最初の作品と云べきものにして、當時來りて崎陽に在りし清人等は皆競ひて之に題跋を書して、其技の絶妙を稱揚し、殊に錢少虎、華昆田、陳逸舟は、口を極めて翁將來の造詣必や測るべからざるものありと激賞せり、翁は又其長崎に在りし間に深く木下逸雲と親交を結びしが、これよりも尙ほ特に記せざるべからざるは、其鐵翁に師事することとなりとす、當時鐵翁は崎陽曹洞宗の一刹なる春徳寺に在りしを以て、翁は之に就きて六法の要を問ひしが、鐵翁の技の凡ならざるものを見て、翁に勸めて久しく長崎に留まらしめむとせしも、翁之を肯せず、長崎に居ること約半歲にして、同年冬歸路に上り、途時再び讃岐の相田濱を過ぎりて京都に入り、實名海屋、山本梅逸、梁川星巖、前田暢堂、小田海樓、中林竹洞等を訪ひて、翌年江戸に歸へり。

嘉永五年は、翁が家庭上の閑歴に關して、一變革を來せる時期なり、蓋し翁の父平吉氏、數子ありしも、皆早世せしを以て、祀の絶えむことを憂ひ、翁の生るゝに先ち、他人の子を養ひて嗣となせしかば、翁は一たび出で、幕臣菊地林太郎の養子となれり、然るに翁は小祿に安んじて、世道を棄つるに忍びず、遂に此年を以て、蹶然として養家を辭せるなり。

嘉永六年、翁年二十三歳なり、此年畫人春谷書畫會を上州藤岡に開きしを以て、翁之に臨み、席上宗方、蘆屋、兒玉、梅坪及び長井、磐谷等に會せり、始め翁の長崎より江戸に還へるや、華椿の畫風を慕ふの念深かりしを以て、一日會て崎陽に在りて畫きし所の花卉の圖一卷を袖にし、椿山の門を叩きて、其批評を求めしに、椿山黙して答へず、椿山後磐谷と語り、談翁に及びて曰く、和亭は實に有望の畫家なりと雖、惜むらくは其畫く所、惲南田、周筮に私淑するに過ぐ、若し彼にして是等諸子の風を學ぶに泥むに終らば、或は恐る、自己の天才を發揮するに由なからむと、磐谷此語を記し、翁に藤岡に會するに及びて、告ぐるに、此語を以てす、翁之を聽きて感奮する所あり、これよりして其研究の方面を一轉するに至れりと云ふ。

翁既に藤岡に遊び、直に江戸に歸へるを欲せず、其次を以て更に進みて北越に入り、先づ河瀬村願乘寺に投ず、時に古橋林平、翁の令名を傳聞して、其門に入れり、次ぎて翁は田中吉左衛門の許に寓し、同氏の爲めに屏風に畫くに、極彩色の群仙の圖、現今福嶋浪藏氏藏を以てせしに、見る者皆其妙腕に驚歎せざるは、なく、翁の名聲是よりして大に北越に揚がり、遠近傳へて畫を需むる者甚

多し、越後に歴遊すること四年にして、翁は海を渡り佐渡に到りしが、居ること半歲にして、再び越後に歸へり、席未だ暖まるに逸あらざるに、遠く函館に遊び、酒田を経て三たび越後に歸へり、三條より鴨に移り、諸方の需に應じて、類に筆を揮へり、而して三條に在りては、長谷川風溪翁の人と爲りを重じて親交を結び、翁の爲めに、幹旋の勞を執れること頗る至れり。

實に翁の北國に留まれるは、前後通じて十四年の久きに亘れり、是れ翁の畫技の進歩の最も著かりし時代にして、又最も多く逸話に富める時代なり、抑も翁は夙に西國諸州を歴遊したることなれば、目のあたり秀麗なる山川を觀、或は古人の遺墨に鑑み、之によりて發明すること少小ならざりしは、勿論なりと雖、其多く見るに足るべき作品を出せるは、實に此北越漫遊の際に始まるものにして、當時畫きたるもの、中には、或は元明の畫に倣へるあり、或は華椿に則りて殆んと其壘を摩せるあり、又時に大和繪風の畫を作れることもなきにあらざりき。

今ま翁が北遊中の逸話の二三を舉げむに、翁の北越に在りし間、會津に遊び、旅宿清水屋に投じて、南原羽峯、鹽田淡齋等、往來せしことあり、時に新發田藩の家士某なる者あり、會津來りて此清水屋に宿せしが、某性暴戾にして、人に彈指せらるゝ、所行多く、一日旅宿の下僕庄助なるもの、失言せるを憤り、之を柱に縛り、燈火を以て其體を燒かむとせしことあり、庄助は絶叫して助を求めたりしに、家人等皆武弁に恐れて近づく者なし、此時翁偶ま室に在りて、淡齋と談ぜしが、此悲鳴を耳にし、家人に問ひて、其實を得るに及び、事黙し難しとなし、刀を提げて武弁の室に入りて、之を詰る、某翁の聲色共に犯すべからざるを見て、俄に恐るゝ所ありしもの、如く、遂に庄助を放ち却りて翁に陳謝せり、是に於て近隣の人之を聞傳へ、翁の平素温厚の畫家なるにも拘らず、事に臨みて斯かる膽勇あるを偉とし、敬慕の餘り、爾後畫を翁に需むる者多きを加へしと云ふ、蓋し翁は幼より明りに人と争ふことを好まざりしと雖、夙に畫家亦武備なからざるべからざるを覺り、劍道及び起倒流の柔道を學びたりければ、此清水屋に於けるが如き氣魄の凛然たるものある固より怪むに足らず、翁が多年海内を歴遊せる間にも、常に毅然として武士の態を失はず、一見して其一般畫家と異なる所ありしことは、翁に會せるもの、皆知る所なり。

翁の北越に於て二たび瀕死の厄に遭ひしことは、翁の晩年屢人に語りて、其再生を奇とせる所なり、其一は翁が越後より函館に赴かむとせし時のことにして、海上濃霧に遭ひ、乗船は針路を失ひ、遂に暗礁に觸れたりしが、幸にして損傷甚しからず、幸うじて上陸することを得たりしと云ふ、次は翁が會津より越後への歸途中の事にして、福取津川の間、於て雪に閉ざされて出づること能はず、殆んと凍死せむとせしが、此時も幸にして一旅人の救を得て免るゝことを得たり。

斯くて翁は嘉永三年より通じて十七年の間、東西に周遊して其技を養ひ、畫道大に成りしを以て、慶應二年江戸に歸り、始めて居を本所達磨横町に卜す。翁が書家高橋石齋氏と交はりしは此頃にして、此相識は翁の生活と技術とに少からざる影響を興へたり。蓋し石齋はもと尾州の藩士にして、圓明流の劍法を傳へしが故あり。藩籍を脱し、江戸に來りて書家となれるものにて、其名は世に顯はれざりしと雖、剛直にして妄りに人に阿ねることを欲せず。誠見群を抜き、其書亦古法に於て大に得る所ありき。されば翁の石齋と相交るや、常に先輩として之を仰ぎ、書畫兩道を語りて相益する所多かりしと云ふ。

明治元年、時正に幕府の顛覆に際し、江戸の物情騒然たり。翁因りて之を避けむと欲し、江戸を去りて上總國九十九里に遊び、齋藤四郎右衛門等の爲めに揮毫する所多く、又同國宮島の大森氏を訪ひて、揮南田の菊花の圖を模寫せしが、其模本は今や茂木房五郎氏の有となる。それより更に下總に移りて野田に遊べり。蓋し是より先き野田の醬油醸造家柏屋の隱居柏齋翁と同じく達磨横町に住し、其文雅の嗜淺からざりしより、翁と相往來せし緣故あるが故なり。

明治二年、翁年四十歳、石齋の二女菊子を娶り、同年達磨横町より深川御船藏前町に移る。當時王政維新の後、日淺かりしを以て、人心尙洶々として畫を需むるの迫なかりしかば、翁の家道頗る振はず。十二月に至り、戸田大和守の推薦に因りて宮内省省掌に任ぜられ、僅に口を糊するを得るに至りしも、事務繁劇にして殆ど畫を作すの暇あらざりき。偶ま内田正雄氏翁の名を聞き、來りて其寓を訪ひ、其畫を見て大に之を歎賞し、囑するに多くの畫圖を以てし、且つ曰く、今や世上惛德尙未だ文藝の興隆に適せずと雖、技に達する君の如くにして、膝を屈して小吏に甘んずること歎するに餘ありと、遂に翁に勸めて職を辭せしむ。職に在る僅かに三月なりき。内田氏夙に歐洲に遊學して學識深遠加ふるに文雅の道を好む。翁が東京に於て遂に畫人として一家を成すを得たるに關しては、内田氏の力與ること大にして、翁も亦之を徳とすること深かりき。然るに内田氏の畫を翁に托するや、口々之を訪ひて、傍より其揮毫を觀其作法に就きて容喙すること稀ならざりしが、翁は笑ひて之に應ぜざるを例としたり。故に内田氏の怫然として立去りしこと亦稀ならざりしと云ふ。さればにや、内田氏嘗て川上東涯を訪ひ、談翁に及びて、和亭は實に當代得易からざるの畫人なり。故に予も亦屢之を訪ひて畫を囑す。然るに彼は其平素の溫順なるに類せず。畫道に於ては頗る剛性を具へ、余が彼の畫く所の意に會せざるものに就きて争ふこと屢なるも、彼容易に之を首肯せず。其執拗甚しければ、再び來るまじと決して立ち歸へるも、ざりとて他に彼に代つて畫かしむるに足る者あらざれば、已むこと得ずして、又彼を訪ふこと、なり實にいまくしき限りなりと云ひしと云ふ。

翁は此の如く内田氏の推獎を得て、専ら丹青に從事し、思を斯道の研鑽に潛めしかば、其技も亦益進みたりと雖、其名は未だ世に知られず。故に其卓絶の妙技も之を認めたるもの多からざりき。今維新草創の當時に於ける東京畫界の状況を顧みるに、幕末に盛なりし明清の畫風は新時代に入りても依然として衰へず。殊に下谷には南宗派の文人畫を業とする者多く、川上東涯福島柳圃等は、其中の鉅々たるものにして、彼の菊池容齋が四條派より出で、一種の歴史畫を描き出だし、柴田是真が同じく四條より轉化して別に一家の畫態を創め、川鍋曉齋が北齋に則りて而かも稍破格の風をあらはせる等を除きては、之を要するに明清風の感化を免るゝものあらざりき。然るに其明清風なるものは華山椿山の逝きてより以來、甚だ形式に流れ、徒らに筆を弄して奇矯の體を描き、多く流行するは席上合作などにして、畫は單に遊戲消閑の一具となり、眞に繪畫と稱するに堪へたるものは、殆んど之を見ること難きに至れり。されば和亭翁も時代の趨勢に伴ひて、一時は文人畫風の作品を多く畫き出せしことありしも、翁は其流行を逐ひし間に、一方に於ては當時の繪畫の典型的に陥りて取るに足らざるものなることを看破したるもの、如くにして、自然物の寫生を努むると共に、日本の古畫并びに元明以前の支那畫に就きて研究を積むこと孜孜として怠らざりき。

明治八年、翁再び北越に遊び、新潟の荒川太三氏に居りしが、約半歳にして歸京し、翌年居を日本橋區久松町に移せり。翁の名此頃よりして漸く揚がり、畫を需むるもの門に絶えず。翁の新に居を久松町に卜するや、人の勸むるに従ひて、賀筵を張り、書畫會を催せしに當時の文士雅客にして來りて之に臨めるもの多かりき。然るに翁素と世に行はるゝ所の書畫會なるものを悦ばず。今始めて之を催して却りて其俗を極むるものなることを厭ひ、心決して此過を再びせじと誓へり。故に爾後各所に催されし書畫會等に、曾て翁の列せるを見ることなかりき。翁の高風以て其一端を窺ふに足れり。

明治十年、第一回内國博覽會開設の舉あり。翁之に松樹牡丹の畫を出品し、花紋賞牌を授與せられ、翁の畫技これよりして廣く邦人に認めらるゝに至れり。蓋し翁は是より先き、官命により花鳥を畫きて、澳國博覽會に出品し、好評を博せしかど、其畫技の普く邦人に知らるゝに至りしは、此松樹牡丹を以て始めとなすものにして、明治の初、揮南田、周笠及び椿山に倣ひ、主として優麗のみ力めたりし翁の畫風は、此畫に於て始めて其骨氣筆力亦大に凡を抜くものあることを示せるなり。

明治十三年、翁其居を駿河臺紅梅河岸に移す。翁の名聲是より益隆にして、門に入るもの甚多く、學生亦十餘名の多きに達せり。而して此頃翁は毎週土曜日を以て、門人に手本を授くるを例とせしかば、早朝よりして夜に及びて、しかも尙憩ふを得ざること屢なりき。後日翁が上梓するに至りし、啡香館畫冊は一は實に此煩を避けむが爲めに著はせしものなり。

明治十四年一月翁宮内省の命を受けて、桃櫻梨花折枝の圖を上る。これ翁が帝室の下命によりて、畫を上りし初にして、其後展命を拜して揮毫せるものあり、而して明治二十六年九月六日には、帝室技藝員を命ぜられたり。翁は又諸種の繪畫の展覽ある毎に推されて其審査の任に當りしは、案より其所を得たる事にして、明治十五年十月には、第一回繪畫共進會の審査官を命ぜられ、同十七年四月には、第二回繪畫共進會の審査官を命ぜられたる等、即是れなり、然れども、翁もと閑居を好み、交を求めて名を售ることを欲せず、其漫遊を終りし後は、毎に家に在りて専ら筆を揮ふを事とせり、されば翁が公生活の閑居としては上述せる所のもの、外傳ふべきもの少く、其居を駿河臺に移すの後に於て殊に然りとなすなり、然れども此閑居の時、即翁が美術家中に就きて顯著なるもののみを舉げむに、先づ帝室及び親王家の下命に依りて畫けるものには、前述の桃櫻梨花折枝の圖を初として其他は凡そ左の如し。

- | | | |
|------------|----------------------|----------|
| 櫻花流水圖 | 御衝立 | 明治十四年六月 |
| 菊花圖 | 御衝立 | 同 年九月 |
| 群仙圖 | 伏見宮殿下御用
御二所殿間換襖張付 | 同 十五年五月 |
| 九友圖 | 御畫幅 | 同 十五年十一月 |
| 薔薇花圖 | 御額面 | 同 十七年六月 |
| 鯉魚圖 | 同上 | 同 上 |
| 旭日松鶴圖 | 明宮御殿御用
御掛物雙幅 | 同 年九月 |
| 若竹龜圖 | 皇后陛下御用 | 同 年九月 |
| 猿及南天圖 | 東化粧の間格
天井六十枚 | 同 年十一月 |
| 四季花卉圖 | 風呂戸六枚 | 同 十九年六月 |
| 啼鶯花卉水に住む蛙圖 | 御居間風呂戸四枚 | 同 年八月 |
| 蘆及蟹圖 | | 同 上 |

野口幽谷畫と對幅たり

- | | | |
|-------------|------------------------|----------|
| 紅梅花鶴圖 | 御常御殿西椽杉戸二枚 | 同 年十月 |
| 松鹿水仙蘆雁遊鷺 | 御常御殿東椽杉戸八枚 | 同 上 |
| 威震八荒圖、三峽飛濤圖 | 中山二位局より皇后宮へ献上
御掛物雙幅 | 同 二十二年三月 |
| 百齡食祿圖、仙桃蟠屈圖 | 中山二位局御用
掛物雙幅 | 同 上 |
| 住吉神社圖 | 御掛物 | 同 年七月 |
| 竹雉圖 | 東宮御用
御衝立 | 同 年十月 |
| 千鳥圖 | 小松宮殿下三島御別荘御用
襖及腰障子 | 同 二十五年一月 |
| 百花圖 | 御掛物 | 同 年二月 |
| 孔雀牡丹花圖 | 皇后陛下御用
御屏風一雙 | 同 二十九年六月 |
| 雉子竹藤圖 | 御掛物三幅 | 同 年十二月 |
| 雪中鴛鴦圖 | | |
| 蘆雁圖 | | |

尙此外に翁が中年以後に於ける最著名なる大作品を舉ぐれば左の如し。

- | | |
|-------|--------------------|
| 牡丹松樹圖 | 明治十年第一回内國勸業博覽會出品 |
| 花果川魚圖 | 明治十四年第二回内國勸業博覽會出品 |
| 雙雉圖 | 龍池會展覽會出品 |
| 名花十友圖 | 外務省御用 |
| 劉阮天台圖 | 明治十五年第一回繪畫共進會出品 |
| 溪邊蘭花圖 | 明治十七年第二回繪畫共進會出品 |
| 漁夫圖 | 東洋繪畫共進會出品 |
| 海邊鶴圖 | |
| 孔雀薔薇圖 | 雙幅 英國ジエー、エスガスレー氏依頼 |

孔雀圖

金地六曲
屏風一雙

明治廿五年米國開龍府萬國博覽會出品 (東京帝室博物館藏)

岩崎彌之助氏依頼

春秋花鳥圖

六曲屏

明治二十八年第三回内國勸業博覽會出品 岩崎彌之助氏依頼

百齡食祿圖

六曲屏

澁澤榮一氏依頼

松鶴退齡圖

六曲屏

日本美術協會展覽會出品

春秋花鳥圖

六曲屏

東伏見宮殿下御藏

水墨松樹圖

六曲屏

風一雙

翁の晩年に及びて成せる作品中特に丹精を凝らしたるものは、皇居御造營の際に帝室の命を拜して畫きし上記の襖繪にして、翁は其稿を起すに方りて、凡そ十餘回の改作をなせしと云ふ、其他特に大作と稱すべきは上に舉げたる岩崎氏所藏の春秋花鳥金地屏風一雙、同氏所藏百齡食祿松鶴退齡屏風一雙、澁澤氏所藏に係かる春秋花鳥屏風一雙、東伏見宮殿下御藏水墨松樹屏風一雙等なるが、岩崎氏所藏の金屏風は稿を明治二十二年の冬に起し、翌二十三年十二月に至るまで、約一年を費して成れるものにして、其稿を起すに當りては、翁は屢實物の寫生に力め、以て修正に資し、苦心に至らざるなかりき、宜なり其作畫の精妙卓絶なるや、然りと雖翁は之を畫き了りて歎息して曰へらく、予未だ至らず描き了りて始めて始めて非なるを覺れる所多しと、翁が終生研究を事とし、孜孜として忘ることなく、毫も小成に安んずることなかりしや、以て知るべし、百齡食祿松鶴退齡の屏風亦實に翁が精練の作にして、之を寫すに先ち、翁は故らに久しく東京を去りて、山中老樹蟠屈の趣と、海邊波濤澎湃の狀とを觀察したりと云ふ、又澁澤氏所藏の屏風は、これ翁が始め稿を同氏深川の邸に起し、後相州小磯に於て完成せしものにて、亦翁が會心の作たるを、失はず、東伏見殿下御藏の水墨松樹屏風に至りては、是れもと中山侯より献上したるものにして、其畫趣の淡泊なる全く別記の數者に反するものあり、眞に以て翁の技倆に於ける雄拔の一面を窺ふに足るべし、蓋し翁の畫は彩色の艶麗なるものもあれど、又骨法を重んずる水墨畫も妙からず。

水墨畫中にては殊に松と竹とに於て見るべきものあり、翁は常に門人に訓へて曰はく、花鳥畫は固より優麗を主とするものなりと雖之を畫きて單に優麗に終るは、以て畫の妙を發揮せるものとは云ふべからず、必若干筆力の雄健を示して、以て剛柔を兼ねしめざるべからずと、又没骨の彩色は翁の殊に長じたる所にして、翁の自ら語る所によれば、翁は此法を惲南田周笠及び華椿に得しのみならず、又光琳に學べる所少からざりしと云ふ、其法たるや、筆に淡き繪具をよくましまして、大膽に落下し、以て一種の趣味ある光澤を得せしむるものなれば、殊に花鳥畫に適合せる手法と云ふべきものなり。

翁初め北宗明清の畫風を學び、次に南宗の没骨花鳥畫を研究し、後或は華椿に擬し、或は流行に伴ひて文人畫をも畫きしと雖亦よく流弊の赴く所を知りしかば、和漢の古畫を見、又は實物の寫生に力めて、修養孜孜として怠らざりき、されば著想と構圖とは終始明清畫の風を免れざりしと雖、年齒五十を超ゆるの後は、其畫大に壯時の作と異なるものあり、支那畫として南北を兼ね、優に自己の本色を發揮したるは論を俟たず、水墨畫に在りても、將た彩色畫に在りても、一種秀潤にして而かも、萬逸の趣致ある畫風を創始するを得たり、又翁常に曰く、假令近く見たる花鳥の光景を寫すに當りても、其布置を定むるに方りては、なるべく之に添ふるに、深遠の趣を以てすることを力めざるべからずと。

翁は其晩年に於て寧ろ優麗なる花鳥畫を畫くこと多かりしを以て、晩年の翁をのみ知れる人は、翁の畫の特長は偏に此の一面にのみ存すと思ふ者少からざるべしと雖、翁が縦横に揮洒せる淡彩若くは水墨の畫にして、其活潑の氣韻の大に見るに足るもの亦少からざるなり、故に翁の丹青の技を公平に品臨せむと欲せば、正に此兩面の長處を看取するを要す、若し夫れ畫題の種類によりて翁の技を評せば、花鳥第一に居り山水之に亞ぐべく、人物に至りては更に其次なるが如し。

翁の畫を作すや、慎重荷もせず、密畫にして既に十中の七八を描き了せるものと雖、荷も意に合せざれば、之を改作するに躊躇することなし、曾て日光に遊び旅中の無聊を消さむとして、席上枯木竹石の圖を畫き、畫將に成らむとして稍意に満たざる所あり、筆を止め門人に命じて之を棄てしめむとす、坐に客あり之を見て曰く、今や世に大家多しと雖、席畫意の如く成らざりし故を以て之を棄て去るものなし、先生の如きは眞に畫を慎む人と云ふべし、願はくは其の畫を得て永く紀念に資せむと、翁笑て答へず、更に筆を執りて畫を塗抹し去る、客呆然たること久しかりしと云ふ、翁又畫稿を作すに方りて人の品評を受くるを喜ぶ、故に客あれば之を畫室に引くを例とし、若し其品評にして肯綮に中るものあれば、直に之を容れて改作をなすに吝ならざりき。

翁の斯道に忠實なること此の如し、されば其晩年畫を需むる者益多く、絹紙堆積して容易に畫き盡くすこと能はざるに至りて、決して世の多數の畫家の如く、幡忽に筆を走せて以て其責を塞ぐことをなさず、其畫にして稿を起すを要するものもあり、又は必先づ寫生に基きて其形態を成し、構圖に修正を加ふること屢にして、紙片を貼付すること多きは十數回に及ぶことあり、又假令稿本を要せざるものもありても、必ず考案を凝らすを常とし、決して漫に筆を下すことをなさず、故に世の翁の畫を備む

る者、其晩年に至りても、毫も慎重を缺き粗漫に流るゝことなかりしを嘆賞して措かず、翁の病を鎌倉に得るや、正に中村清蔵氏の依頼に應じて金屏風に四季花鳥を描きしが、病漸く重きに及びて工を進むること能はず、語りて曰く、我病の故を以て遂に此畫を完うすること能はざるは、嗚呼に亘くこと大なりと雖、意に會せざるの筆を動かして強ひて之を完ふせしむるは、これ予の忍び得る所にあらず、寧ろ半成にして終らしむるに若かざるなりと、以て翁の用意の一端を窺ふを得べきなり。

翁は其作畫以外に於て別に著るしき著述をもなせり、就中其門人をして作圖法の要義を知らしめむが爲めに著はせる「俳香館畫譜」は、翁が其壯時より諸方に於て觀たる古畫の縮寫として編纂せられたるものなれども、これ翁が謙讓の念厚きよりして若かく稱せしものにして、其實は卷中自己の作圖に成るもの頗る多く、稿を明治十六年に起し、爾後約一年を費して成せるものにして、其圖は山水人物花鳥の三種を收めたれば、藍本とじて甚有益のものなり、然るに翁は單に此書の編述に苦心焦慮せるのみならず、其製版に至りては、全然之を商賈に委任し去るを欲せざりしかば、自ら當時に於ける木版彫刻の良工、木村徳太郎、三井長齋、金田益吉等を選択し、之を自宅に聘して、割刷に従事せしめ、之を監すること頗る綿密にして、若し筆法をあらはして其正を得ざるものあれば、一々之を改刻せしめたり、されば獨り翁の著述が之によりて其精緻を完うするを得しのみならず、彫工等も之が爲めに研究を積み、其技を上達せしむることを得しものにして、木村徳太郎の名を掲げたるも、此著述に參與したるに始まり、三井長齋の如きは、後日遂に斯道の名人として稱揚せらるゝに至れり、俳香館畫譜の著述に次きて翁は明治二十年に長尾景彌氏の徳憑によりて花鳥彩色畫の一著作をなし、題して「花鳥畫譜」といひ、其木版彫刻者は前記の木村徳太郎、三井長齋の兩名にして、色摺は田村鐵之助之に當り、其木版色摺の精巧なるに至りては、從來多く其比を見ざる所なりしが、其發行の第一帖のみにて止めるは惜むべし、翁又丹青一斑の著あり、明治廿九年吉川半七をして之を出版せしむ、其精巧の點に至りては、到底花鳥畫譜に比すべきものにあらざるも、同じく木版色摺にして、中等教育の教科書たるに適するものなり、之を要するに翁が「俳香館畫譜」及び花鳥畫譜の著は、一面に於て我國の木版色摺を發達せしめたる功大なるものにして、後日翁の義弟たる自恃庵高橋健三氏が岡倉覺三氏と共に美術雜誌國華の發行を創め、精巧無比なる木版色摺を世に出すに至りたることの如きも、其實翁が之が前驅として木版を奨励せることありしに因ると云ふも、決して不可なきなり。

翁人となり、温良恭謙溢りに人と争ふことなく、居常衣を正うして端坐す、家人と雖其情容あるを見しことなし、故に人を叱責すること少かりしにも、拘はらず、家人門弟皆肅然として容を改めて翁を畏敬せざるはなかりき、翁亦性酒を嗜まず、且つ三食の外

食餌を口にすること稀なり、消閑の遊戲として弄びしは、唯圍碁あるのみ、平素心を世事に留めず、營々として身を畫事に委ね、一日と雖筆を手にならずと云ふことなく、日中は絹素に従ひ、夜半人定まるに及びて圖案を經營す、故を以て日天に中して漸く起き出づること屢なりき、晩年に到りて翁益々世事に遠かり、新聞紙の如きも之を手にならずと云ふことなく、人に語りて曰はく、我は明治の畫家にあらずと、或人嘗て翁に問ふに、當今畫家の西洋畫風を折衷するの可否如何を以てす、翁答へて曰く、若し畫家にして先づ己を正しくして、而して後自然を觀照するに意を用ゐること切ならば、其作物や必ず妙ならん、畫法何ぞ必しも洋の東西を論ぜむ、折衷の可否の如きは予の知る所にあらずと。

翁が流俗を厭ふこと眞に古君子の風ありしと云ふべし、劔客小暮房雄翁の畫を敬慕すること深く、自ら努めて翁の畫を蒐集するに至りしが、曾て翁の作畫を陳して展覽會を催さむとせしことあり、事翁に聞かると及びて、翁之を拒みて曰へらく、今や自己の作畫を陳して公衆の觀覽に供すること、滔々として世に流行すれども、これ予の欲せざる所なりと、翁の此言一は謙讓の意に基くこと明なりと雖、又竊かに世流を諷するものといふべし。

小磯の別業は翁の晩年に隱退せる所なり、翁是に居ること約一年にして更に鎌倉に移り、長谷村甘繩明神の東方に一家を卜して、此處に閑居し、而かも尙孜孜として斯道に盡瘁し、筆を措くこと少かりしが、遂に二豎の冒かす所となり、病むこと一歳、明治三十四年九月二十八日を以て歿せり、時に歳七十二、翁高橋氏に娶り四子あり、長男精一、長女きの子柘植氏に嫁し、二女邦子は門人原丹橋氏に嫁し、二男植二氏は義弟高橋健三氏の養嗣子となる。

明治四十五年一月

門弟子謹識

和亭集 上卷

目次

富岳曉霽圖

絹本着色 豎四尺 橫一尺二寸三分

東京 中村喜平治君藏

帝室御物

春苑雙雉圖 威震八荒圖 秋汀蘆雁圖 三幅對

絹本着色 各幅豎五尺一寸 橫四尺二寸

觀濤圖 秋溪行旅圖

絹本着色 各幅豎五尺一寸五分 橫一尺六寸五分

東京 宮本 仲君藏

松鶴遐齡圖 受天食祿圖 六曲屏風 雙東京 男爵岩崎小彌太郎君藏

絹本着色 各隻豎五尺二寸五分 橫一丈一尺九寸

劉阮天台圖

絹本着色 豎五尺四寸五分 橫二尺二寸二分

千葉縣 茂木七郎右衛門君藏

春林紫雪圖

絹本着色 豎五尺二寸一分 橫二尺九寸七分

東京 男爵伊集院五郎君藏

萬竿煙雨圖

紙本水墨 豎五尺三寸七分 橫二尺三寸六分

東京 中山佐市君藏

枯木集禽圖

絹本着色 豎四尺五寸九分 橫一尺八寸九分

東京 宮本 仲君藏

山水花卉圖

絹本着色 六曲屏風一雙 各畫豎三尺八寸七分 橫一尺二寸四分

千葉縣 茂木房五郎君藏

楊柳觀音圖

絹本着色 豎二尺四寸七分 橫七寸九分

東京 前島銀藏君藏

雙雉圖

絹本着色 豎四尺三寸七分 橫一尺七寸

新潟縣 荒川才二君藏

王母圖

絹本着色 豎五尺一寸五分 橫一尺八寸五分

東京 伊東銀之助君藏

閻家全慶圖

紙本着色 豎三尺九寸八分 橫一尺一寸

東京 松本長兵衛君藏

辛厨風味圖

絹本着色 豎四尺四寸五分 橫一尺八寸五分

千葉縣 茂木房五郎君藏

蘆雁圖

絹本着色 豎四尺九寸八分 橫二尺八寸一分

東京 福島浪藏君藏

物闌芳菲圖

絹本着色 豎四尺八寸 橫二尺三寸八分

千葉縣 茂木佐平治君藏

兩竹圖

絹本水墨 豎四尺八寸八分 橫二尺八寸三分

東京 田村光顯君藏

圓家全慶圖

東京 米山 登君藏
絹本著色 豎五尺八寸三分 橫二尺八寸八分

富岳飛龍圖

東京 松本長兵衛君藏
絹本水墨 豎一尺五寸六分 橫二尺九寸七分

天桃海物圖

東京 田畑常吉君藏
絹本著色 豎三尺四寸五分 橫三尺二寸五分

赤壁賦圖

東京 中村清藏君藏
絹本著色 豎四尺一寸二分 橫一尺六寸八分

霜稻群雀圖

東京 遠藤金次郎君藏
絹本著色 豎四尺 橫一尺二寸二分

秋關圖

東京 久能木彌三郎君藏
絹本著色 豎五尺八寸一分 橫一尺九寸二分

游龍梅村肖像

東京 游龍隆吉君藏
絹本著色 豎三尺七寸三分 橫一尺三寸五分

海鶴遐齡圖百齡食祿圖

雙幅 東京 廣部清兵衛君藏
絹本著色 各幅豎四尺四寸 橫二尺二寸八分

冬陰蔽雪圖

東京 田崎善五郎君藏
紙本水墨 豎五尺六寸 橫一尺六寸一分

松鷹圖

橫濱 矢島善七君藏
絹本著色 豎四尺七寸八分 橫一尺八寸六分

秋夜雙兔圖

新潟縣 西脇新三郎君藏
絹本著色 豎四尺二寸一分 橫一尺六寸七分

王右軍觀鵝圖

三重縣 小津與右衛門君藏
紙本著色 豎二尺二寸九分 橫一尺九寸二分

老圃秋容圖

東京 川崎金三郎君藏
絹本著色 豎五尺四寸 橫二尺一寸

南極壽星圖

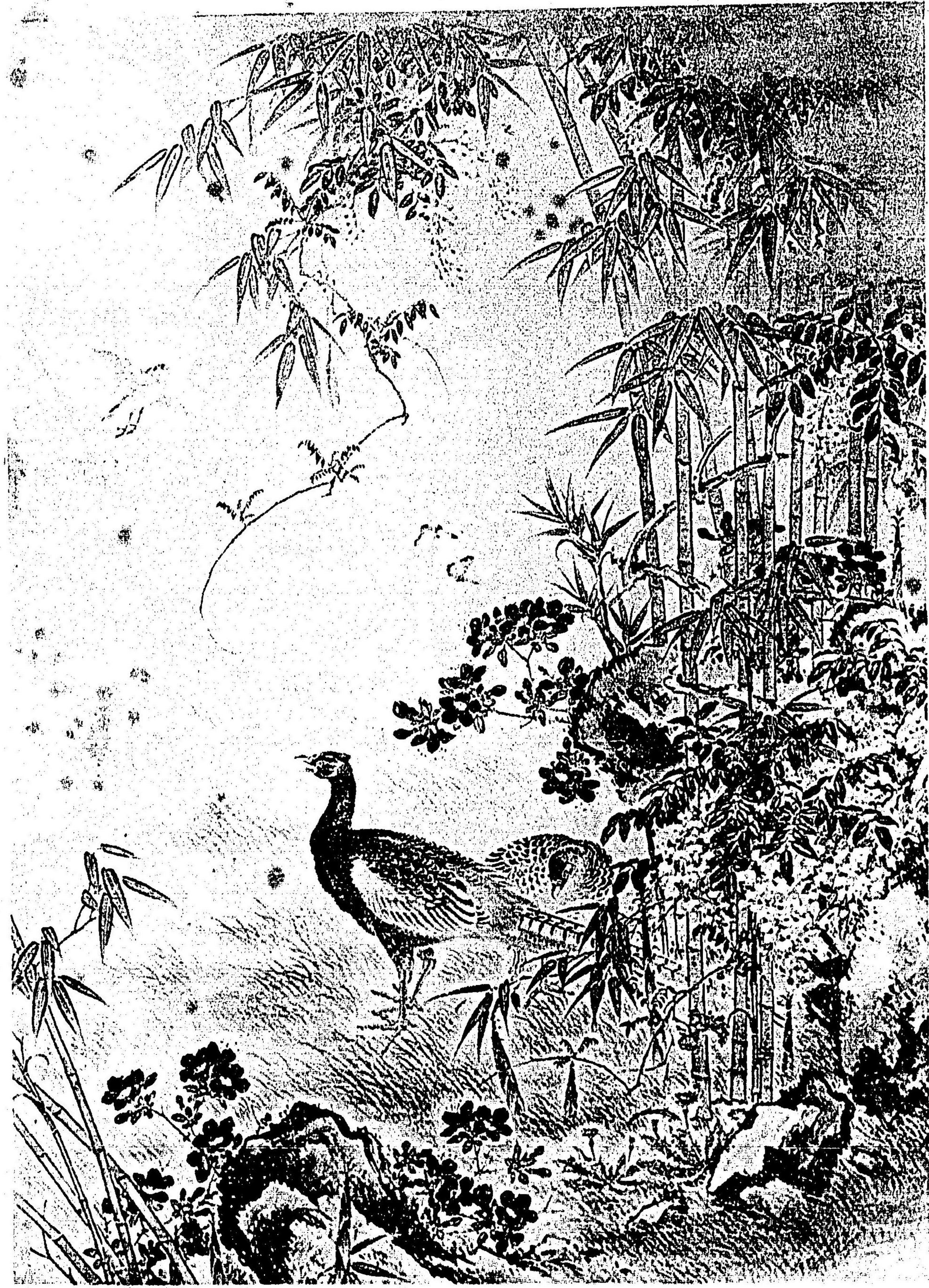
山梨縣 小池利八君藏
紙本著色 豎三尺八寸九分 橫一尺九寸八分

雪景山水圖

東京 山田金三郎君藏
絹本著色 豎三尺一寸 橫一尺二寸八分



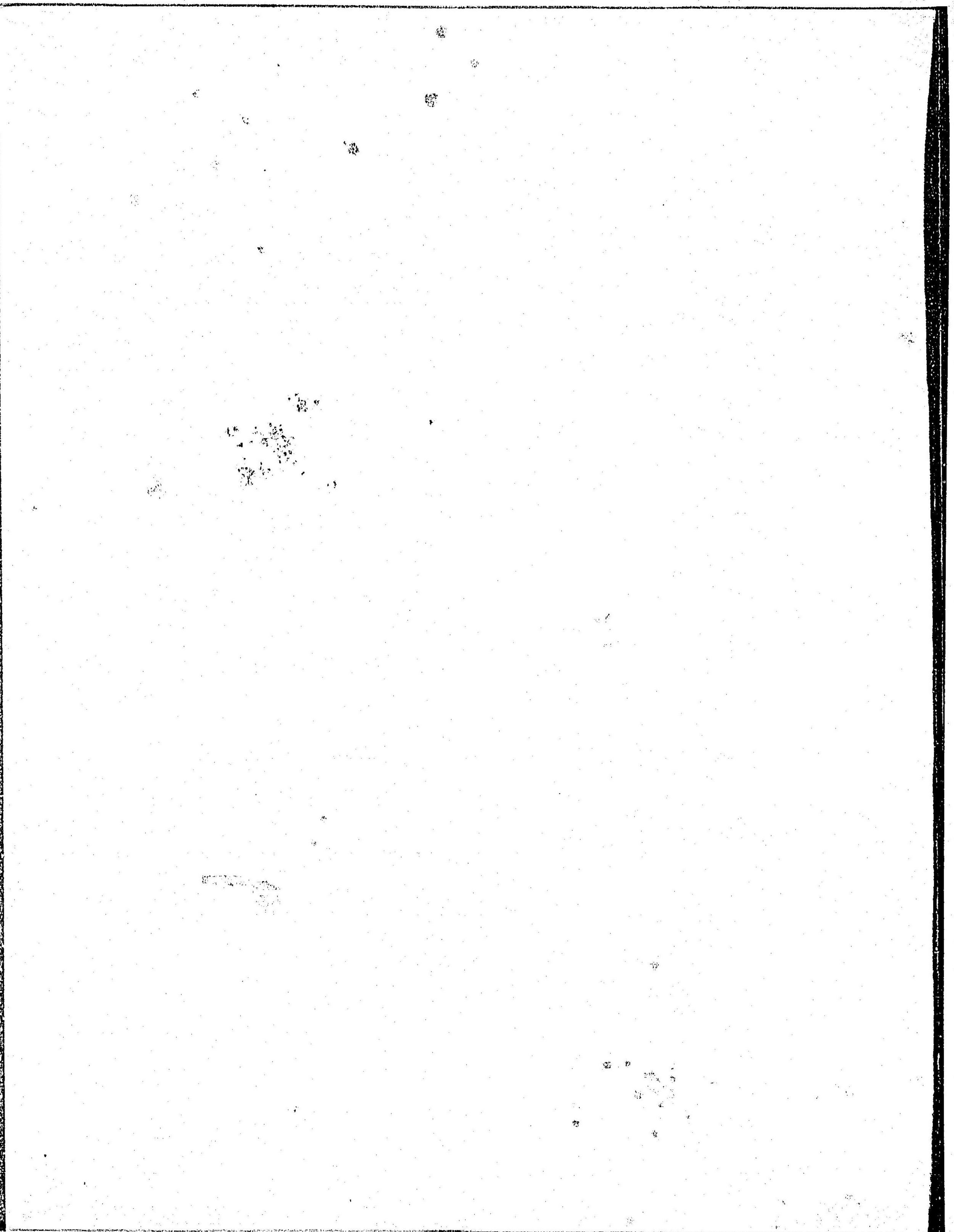
富嶽映霽圖 中村喜平次君藏



帝室御物 春苑雙雉圖三幅對左



帝室御物 成文八景圖三加刺十





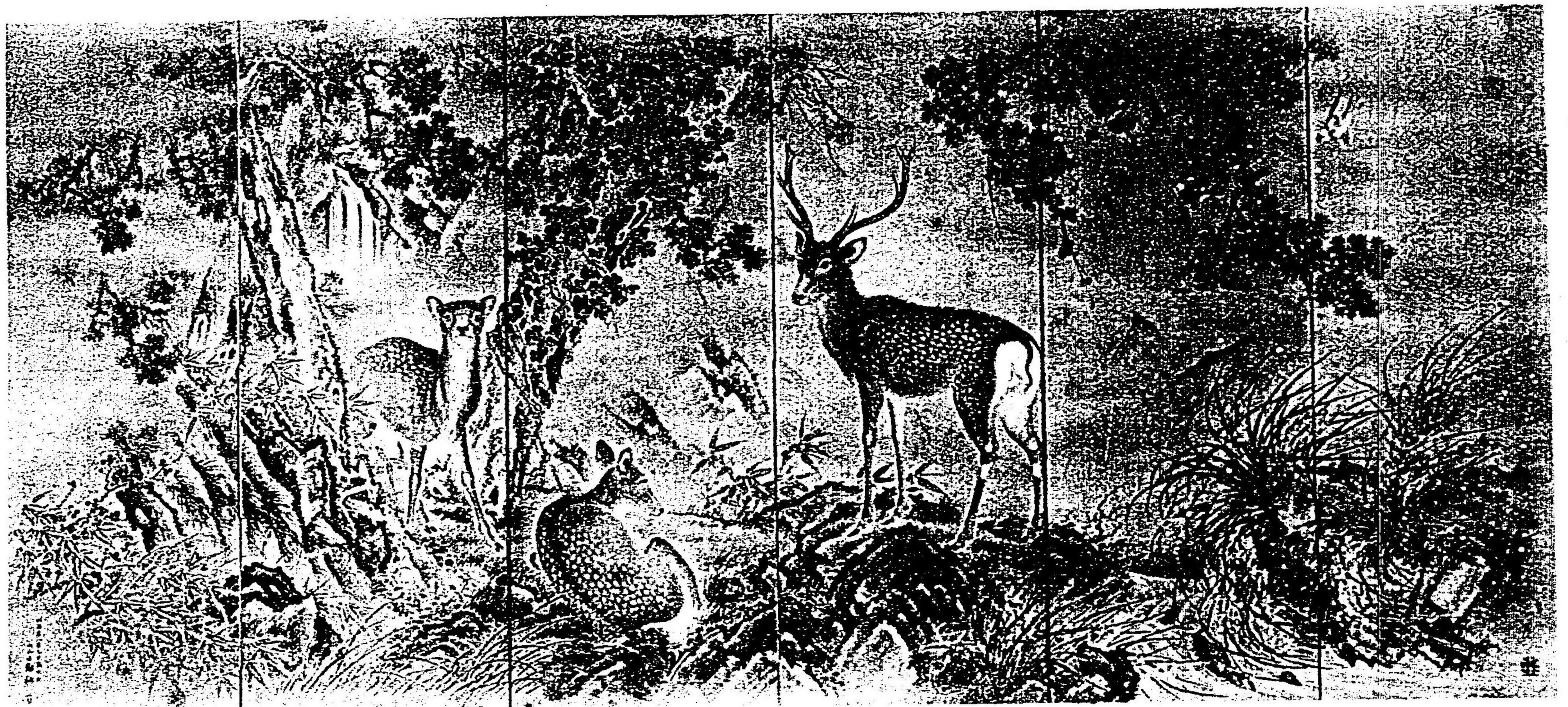
帝室御物 秋汀雁雁圖 三幅對右

觀漢行旅圖 宮本仲光藏





松鶴遊仙圖
六
岩崎小波六右筆



受天食野園
岩地小松三石並



劉阮天台圖 茂木七郎右衛門君畫

林林雪雪 伊集院五郎君



萬年如西國 中山位市之景



萬年如西國
中山位市之景
畫
一九二九年六月十日
國

枯木集禽圖 宮本竹若画



竹若画

山水花竹图六首并跋 茂木房五郎石流





楊柳觀音圖
清馬銀波君施



馬銀波畫

雙雄圖 荒川才二君藏



雙雄圖
荒川才二君藏
紅梅
三月廿六日
才二君藏

王母圖 伊東錦之助右波



明和二年十一月五日
伊東錦之助右波
繪

図家全慶圖 松本長兵衛君藏



松本長兵衛君藏
全慶圖
丁未年夏月

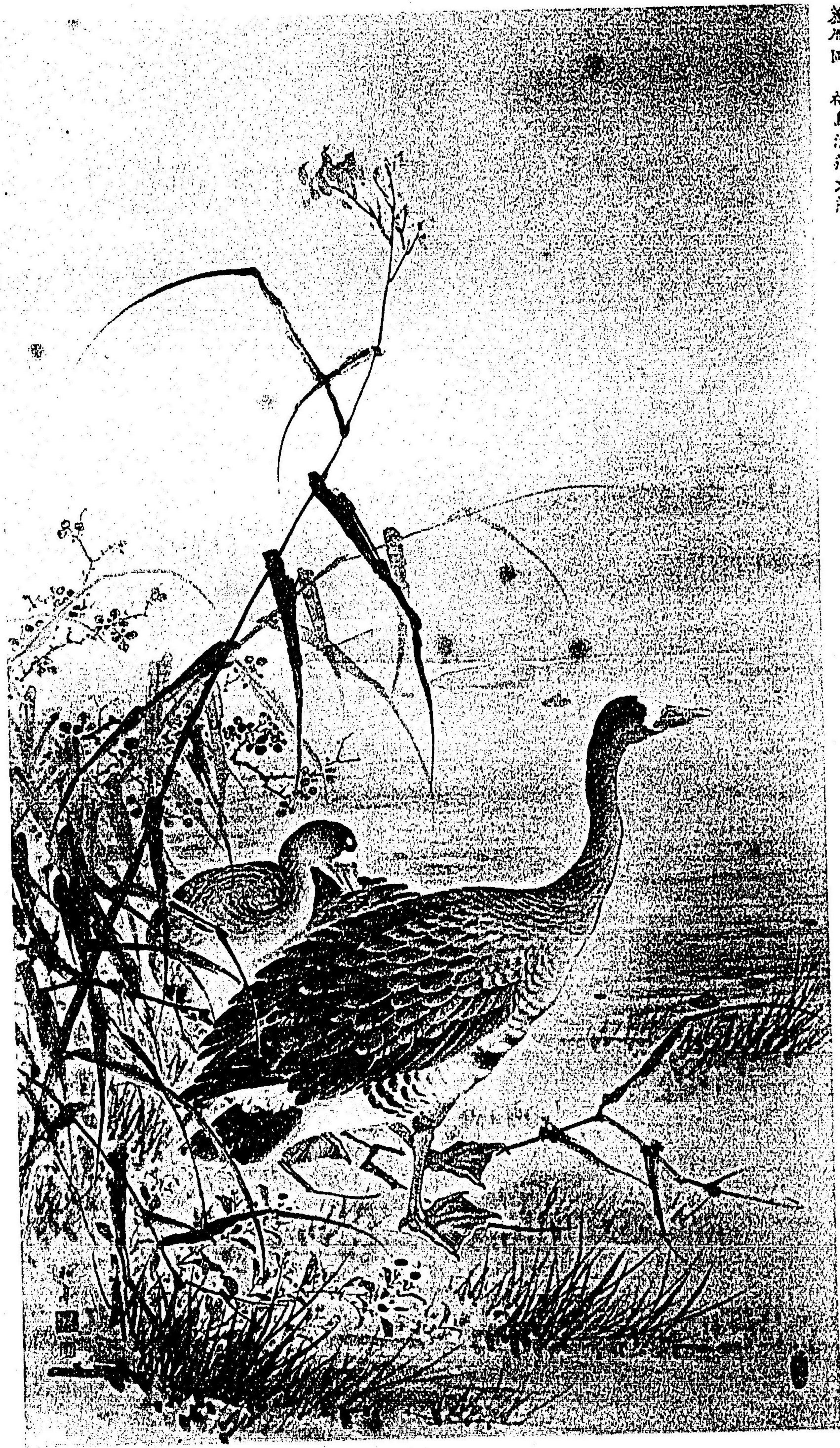
辛厨風味圖 茂木房五郎君畫



辛厨風味
明治六年一月和字松岡吉國印



葦原圖 福島浪蕪文法



物圖芳菲圖 茂木依平治石版

己未年夏月
王公大臣
...



雨竹圖 田村光顯 石版



和春 田村

田村光顯



閑家全慶圖 米山登岩紙

富嶽龍泉圖 松本長兵衛 石菴



乙丑秋
松本長兵衛
主人書



天机海内图 田知常吉龙藏



赤野山園 中村清成岩流

霜稻雀圖 遠藤金次郎書

己未年十一月
金次郎書





秋蘭圖 久世木菴三郎石菴

海龍梅村肖像 東京 游龍庵古堂藏





海鶴遊仙圖
百禽食標圖
廣部清兵衛右旅

冬陰叢雪圖 田崎善五郎君藏



冬陰叢雪
田崎善五郎君藏

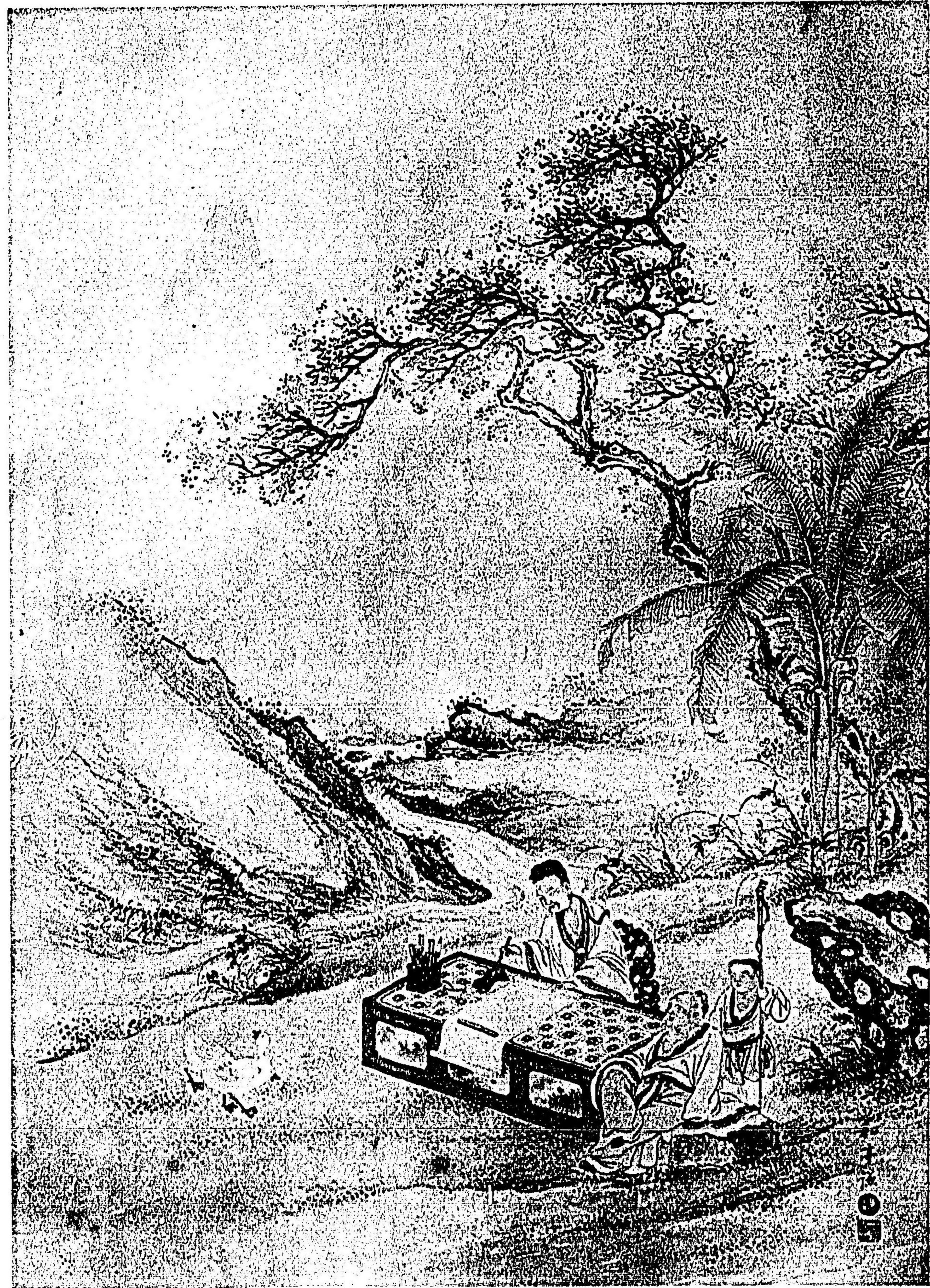


松鷹圖 吳昌碩七石版

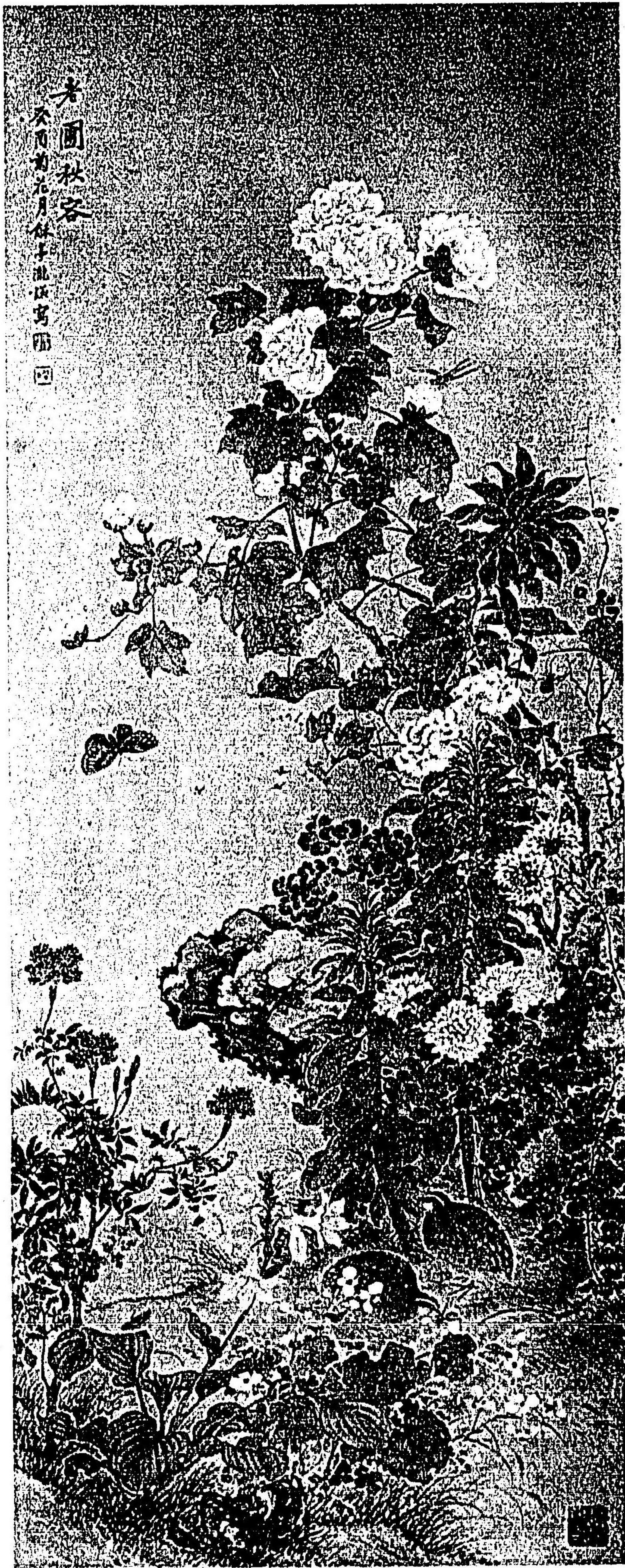
此畫作於一九一二年一月一日 吳昌碩畫
畫中一松乃由吳昌碩所繪畫
一九一二年一月一日 吳昌碩



秋化雙兔圖 西脇新三郎若波



王右軍觀鵝圖 小津與右衛門君放



老圃秋容 川崎金三郎画

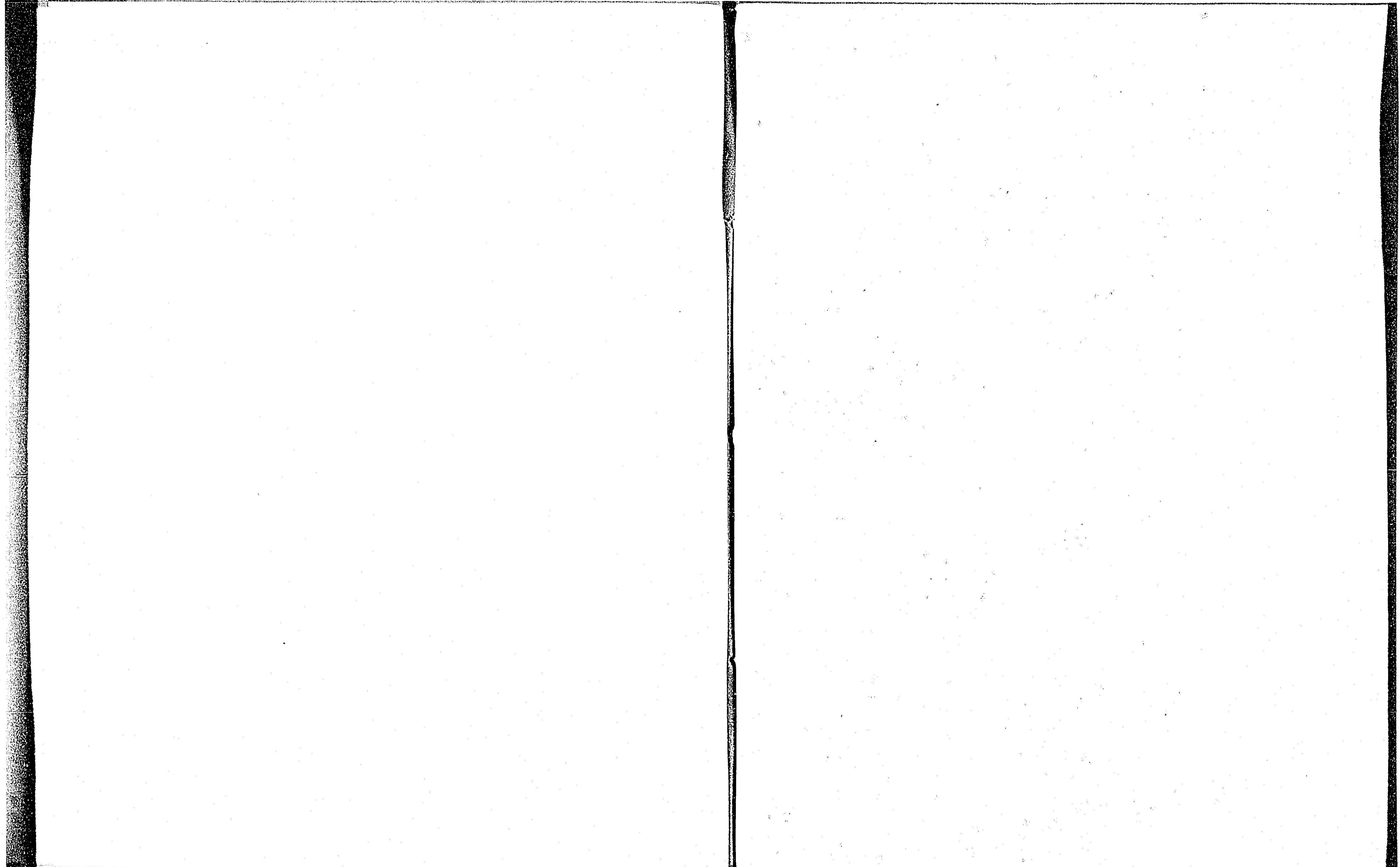
南無寺聖圖 山形縣 小池利八石版





雪景山水圖 東京 山田金三郎岩波

雪景山水圖
東京
山田金三郎
岩波

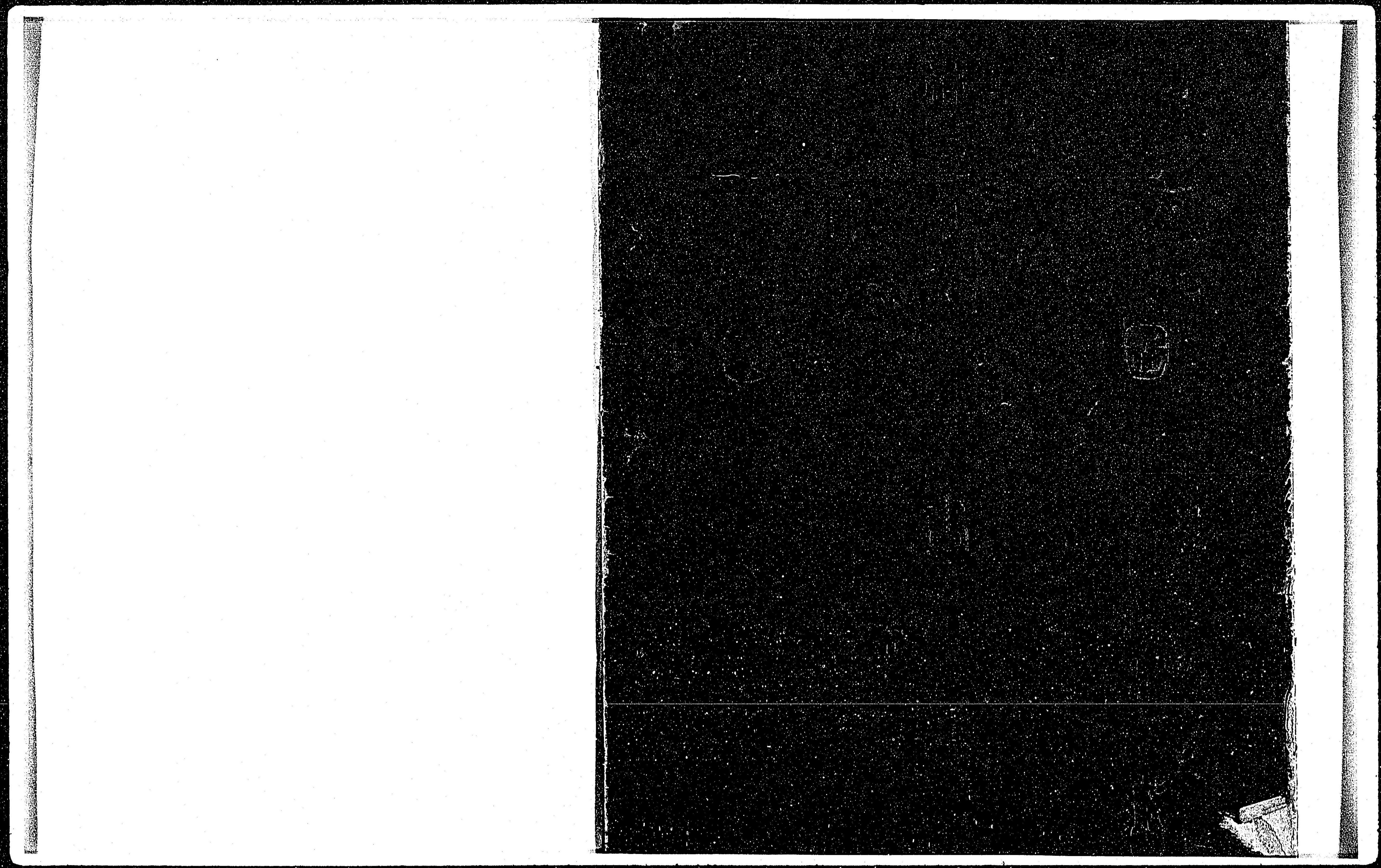


470

13

[The left page of the manuscript is mostly blank, with some faint, illegible markings and a vertical line near the left edge.]

[The right page of the manuscript is heavily obscured by a dense, dark, grainy texture, likely due to the scanning process or the condition of the original document. No text is legible.]



景

070645-001-2

410-13

和亭集

滝 和亭/画

M45

CEC-2079





和亭集

上

(A)

